

《ワークショップ》
電子書籍におけるレイアウトと情報化
——アクセシビリティを視座として——

登壇者

討論者：小林潤平（大日本印刷株式会社 AB センターICT 事業開発本部）

討論者：矢口博之（東京電機大学理工学部）

討論者：植村 要（立命館大学人間科学研究所）

司会者：野口武悟（専修大学文学部）

概 要

出版物を構成する要素の一つに、レイアウトがある。電子書籍においては、固定レイアウトが、目で見えて読む者にとっても音声で読む者にとっても、アクセシビリティが低いのに対して、リフロー型は、目で見えて読む者にとっても音声で読む者にとっても高いアクセシビリティをもたらす。しかし、リフロー型であっても、レイアウトの調整が全く不要というわけではないだろう。本ワークショップでは、読書アシストを例に、電子書籍におけるレイアウトの意義について、アクセシビリティの観点から再検討する。

キーワード：読書バリアフリー、アクセシビリティ、レイアウト、電子書籍、視覚障害者等

出版物を構成する要素の一つに、レイアウトがある。著者・編集者は、著者の意図の表現や、読者の読みやすさなど、様々な側面を考慮してレイアウトを調整する。本ワークショップでは、電子書籍におけるレイアウトがもつ意義と今後の向かうべき方向性について検討する。

電子書籍は、レイアウトの観点から、固定レイアウトとリフロー型に分類することができる。現在、電子書籍の販売タイトルの多くを占めるマンガや雑誌などの多くが、固定レイアウトで出版されている。これらは、視覚提示物がコンテンツの中核を成す出版物であるものが多く、紙面をそのまま画像形式にすることが多い。固定レイアウトが採用される要因の一つに、レイアウトがその本が表現する内容の一部を成していることにあるだろう。しかし、活字の本において著者・編集者がそのレイアウトで意図した読みやすさを、そのまま電子書籍に持ち込む結果、読みやすさが損なわれるという逆説を生じている。

一方、リフロー型の電子書籍は、ディスプレイのサイズによって、行の折り返し位置が変わるなど、レイアウトが可変的である。つまり、リフロー型におけるレイアウトは、デバイスに依存するものになっている。この側面をさらに推し進めたのが、「読書アシスト」といえるだろう。読書アシストは、読者の目の動きがレイアウトによって変化する、という側面に注目した文章レイアウト技術である。1 行ずつ行頭を下げて階段状に表示するなど、文字配置や改行位置の調整によって読者の余分な目の動きを減らし、読み速度の向上につなげている。つまり、読書アシストでは、リフロー型であることを前提に、レイアウトを読者に依拠するものとしたのである。

振り返ってみるならば、視覚障害者は、元より活字の本をも情報と捉えて読んできたといえるだろう。視覚障害者等が活字の本を読むに際しては、点訳、音訳、データ化などの方法による媒体変換を行う。この媒体変換は、活字の本の記述内容を、いわば情報として扱うことで可能にしている。また、活字の本がもつレイアウト情報は、最小限にされる。また、電子書籍に関して、音声読み上げについては、リフロー型でなければ困難である。

このように、レイアウトを著者・編集者が調整する固定レイアウトが、目で見えて読む者にとっても音声で読む者にとっても、アクセシビリティが低いのに対して、レイアウトをデバイスや読者に移転するリフロー型は、目で見えて読む者にとっても音声で読む者にとっても高いアクセシビリティをもたらす。しかし、リフロー型であっても、レイアウトの調整が全く不要かという点、そうではないだろう。

そこで、本ワークショップでは、電子書籍におけるレイアウトの意義について、アクセシビリティの観点から再検討する。具体的には、著者・編集者のものであったレイアウトを、デバイスや読者のものに移転すること、また、この移転によって求められるレイアウトがどのようなものであるか、その前提としての出版物を情報として捉えることについて、登壇者らが議論する。